

意味的側面から見た形容動詞と形容詞の連続性

山田 恭子

1. はじめに

形容動詞は、数々の品詞との連続性が指摘されている。形容動詞が他品詞との連続性を問題にされるのは、形態的・意味的・統語的に類似性を持つものが複数存在するためである。形容詞とは、意味的・統語的に、名詞、副詞とは主に形態的に重なるものがある。これまで品詞間の連続性は、寺村（1982）を中心に、主に形態面から分析が行われてきた。しかし、本稿では一貫して意味的側面からこの連続性を観察していく。これは、カテゴリーがその構造を持つには、意味機能に何らかの理由・動機が存在する（上原2002）という認知言語学の視点に立脚したものになる。本稿では、形容動詞と意味的に連続性を持つ形容詞を対象として、分析を行う。形容動詞と連続性を持つ語の意味上の特徴をとらえることで、品詞間の連続性の一端を明らかにすることが本稿の目的である。

2. 先行研究

2.1 これまでの形容動詞と形容詞の対照研究

「形容動詞」という名は、形容的性質を持ち、動詞的に活用する特徴から、芳賀（1905）が冠したものである。形容動

詞は、学校教育の文法体系では活用する自立語の「用言」に含まれる。動詞や形容詞と同格に並べられるが、形容詞とは意味的な重複から一律に扱われることが多く、その地位は言語理論において絶対的なものとはいえない。ここで形容動詞の日本語研究での位置づけを、形容詞とのかかわりを中心に概観する。

現行の学校文法のもととなった橋本（1948）の文法体系では、形容動詞を語幹（「静かだ」の場合の「静か」と、活用語尾「静かだ」の場合の「だ」）を合わせて一語相当とし、単一の品詞としている。橋本は特に、文語文法との接続を重視し、形容動詞を一品詞として立てる必要性を説いた。しかし、形容動詞は活用の形態上、形容詞や副詞から脱しているものの、意味上で似かような形容詞と分けて扱うべきかどうか疑義を呈しており、形容詞の低位分類に置く見方も示している。

橋本のように形容詞と形容動詞を同じ類に据える論者は多い。鈴木（1972）が教科研文法の大成として著した品詞体系では、形容動詞の特設を否定している。形容動詞は形容詞の低位分類として「第二形容詞」に置き、連体詞も形容詞の類に入れている。形式重視の橋本文法とは異なり、統語重視の教科研文法の立場が顕著に見られる。村木（2012）も教科研文

法に則り、規定用法・述語用法・修飾用法における語尾の形式によって、形容詞・形容動詞・名詞とされてきた語類を「第1形容詞」「第2形容詞」「第3形容詞」に分けている。仁田(2000)は橋本文法での形容詞をイ形容詞、形容動詞をナ形容詞とした。これらの語は日本語教育でも用いられている。

形容動詞を形容詞の下位区分に置く立場に対して、形態の類似性から、名詞とのかかわりを説く立場も存在する。

時枝(1950)は形容動詞を単一の品詞と認めない立場である。時枝は、「静か」「丈夫」という語形の変化しない語(体言)に、指定の助動詞が付いたものととらえ、「静かだ」は二語相当だとしている。寺村(1982)は、形容動詞を名詞と形容詞の中間的な位置にあるものとし、「名詞的形容詞」「名詞詞」と呼んだ。これは、時枝の形容動詞語幹を体言とする見方と、形容動詞を形容詞の下位分類とする見方の折衷案というべきものである。形容動詞を名詞類の下位区分に位置づけ、名詞類を大きく「体詞」に区分した加藤(2015)などの論もある。このように形容動詞の位置づけはさまざまに議論されているが、形容詞と形容動詞の意味の対照関係は、認知言語学の立場からの研究に特筆するものがある。以下の研究は、形容詞と形容動詞の意味傾向を考察したものである。

Dixon(1977)は、典型的な形容詞の意味クラスとして、物が空間に占める寸法、物体の性質、色、人の性質、年齢、評価、速度の7つのクラスを示した。それに対し、Backhouse(1984)は、形容詞には上記の7つのクラスが見いだせるが、形容動詞には色、年齢、速度は存在しないと考察している。

上原(2002)はこれらの研究をもとに、『分類語彙表』の類出語から抽出した形容詞・形容動詞406語を対象に、二品詞の意味の差異を調査している。上原はDixonの示した物体の性質を細分類し(硬度、形、重さ、温度、味、地形関係)、加えて、9つのクラス(光、確定・必然性、必要性、運、技術、複雑さ、ファッション、分布・区別、対照)を追加した。上原はこの調査から、形容詞は抽象的ではなく具体的な有形物の状態や性質を表す「基本的」な意味を有する語が多く、形容動詞は「基本的」でない下位レベルの語に多いと考察している。

認知言語学では以上の論が見られるが、形容詞と形容動詞の意味傾向に関する研究は、形容動詞を形容詞の下位区分に置いて、一律に扱うものが多く見られる。二品詞の意味傾向の分析のため、日本語研究上での形容詞の意味のとらえ方をまとめる。

西尾(1972)は、日本語の形容詞には客観的な性質・状態を成すもの(属性形容詞)と、主観的な感覚・感情の表現を成すもの(感情形容詞)があるととしている。この二つは形容詞の基本的な分類基準だとされている。論者によって、感情形容詞を情意形容詞とし(春日1973、北原2010ほか)、属性形容詞を状態形容詞とすることもある。

しかし、実際にはこのように完全に二分されるわけではない。時枝(1950)は、感情形容詞にあたる「主観的表現の語」、属性形容詞にあたる「客観的表現の語」、その中間的な「主観客観の総合的表現の語」が存在するとした。時枝の主張は統語的な意味変化に則ったものといえる。

先行研究では、先の二分類に依らない形容詞の意味分類も行

表 1：形容詞・形容動詞の各研究者の意味分類

西尾 (1972)	Dixon (1977)	Backhouse (1984)	樋口 (2001)	上原 (2002)	八亀 (2008)
空間的な量	寸法	寸法	〈特性形容詞〉 資格づけ的な評価 形 平らさ 構造 活動のし方 色 透明さ 量的な特徴 (年齢も含む) 必然性 抽象性 予想と現実との不一致 資格づけ+価値づけの評価 性格 知性 現象の様子 生理的な特徴 美 功利	寸法	Aグループ 特性形容詞 (時間的限定性無) 《特徴のちゆめし》に《特徴》をさしたず構造が前面化 Bグループ 特性形容詞 (時間的限定性無) 話し手の恒常的な好悪の評価が前面化 Cグループ 特性+状態 《特徴のちゆめし》に《特徴》をさしたず記述的な構造と評価的な面が拮抗 Dグループ 状態形容詞 (時間的限定性有) 《特徴のちゆめし》に《特徴》をさしたず構造が前面化 Eグループ 状態形容詞 (時間的限定性有) 評価的な面が前面化
ものに関する属性	物体の性質	物体の性質		物体の性質	
味 におい				硬度 形 重さ 温度 味 地形関係	
音	色	色		色	
ひとに関する属性	人の性質	人の性質		人の性質	
年齢	年齢	年齢		年齢	
〈評価〉	評価	評価		評価	
速度	速度	速度		速度	
光				光	
必然的な事態				確定・必然性 必要性	
運			運 技術 複雑さ ファッション 分布・区別 対照		
ものごとに関する属性			直接的な反応 生理的な状態 直接的反応+価値づけの評価 心理的な状態		
異同・関係					
気持ち・感情					
程度					

われてきた。各論者の形容詞の意味体系を先の上原らを含め、表1に示す。表1から形容詞の意味は決まった体系が確立されていないことが読み取れる。

西尾(1972)は、明治から昭和にかけての文学作品を資料として、形容詞の意味分析を行った。表の分類は、西尾の記述を筆者が整理したものである。(評価)を一分類としているが、西尾は形容詞の「評価性」を、以下のように述べている。

形容詞は一般に、人間がものごとをどのように感受したかをあらわすという性格が濃いので、言語主体(ないしその言語社会一般)のものごとに対する評価・価値づけの要素を含んでいることが多いといえよう。

形容詞の意味は全般に主観性が含まれるということである。また、形容詞の価値表現は、客観的な属性の表現と分かちがたいが、一般に物事の性質・状態とされる「四角い」「赤い」などは、主観的な好悪・選択から独立した客観的な要素が強く、「よい」「くだらない」などは、主観的な要素が強いとも指摘する。

主観性の強弱に即して「評価」をとらえる西尾に対し、意味内容でとらえる立場もある。上原(2002)は、「よい」「みごと」などを(評価)のクラスに分け、語単体に評価の意味が備わるか否かで(評価)をとらえている。上原は、形と意味の相関に主眼を置いており、意味の派生や多義性は分析に考慮していない。上原は、「基本的」かつ「最も普通に使われている意味」で分類しているため、すべて一語一分類に収められている。

八亀(2008)は、時間的限定性と評価性に注目して、形容詞の基本的な性質を考察している。八亀は、時間的限定性を「具体的・一時的・偶発的な(現象)か、ポテンシャルで恒常的な(本質)かの違いを捉えるもの」と述べている。八亀は、形容詞は(状態)〈存在〉(特性)〈関係〉の意味を表すが、中心的なのは(状態)〈特性〉だとし、形容詞を状態形容詞と特性形容詞に分類した。これは、感情形容詞と属性形容詞の二分類とは一線を画すが、樋口(2001)なども同じ立場である。

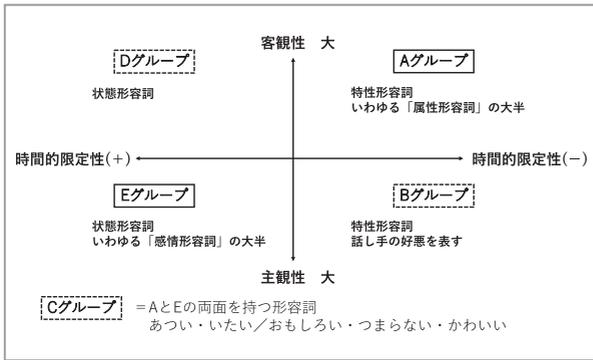


図1：八亀（2008）による時間的限定性と評価を軸とする形容詞分類

樋口が定義する〈状態〉とは、人や物の内面や外面にあらわれ、人や物の相互作用によって変動する現象である。もう一方の〈特性〉とは、物に恒常的に備わっている、持ち前の性質だとしている。形容詞述語文の「評価」のとらえ方は西尾と同じである。樋口は、状態形容詞と特性形容詞の二分類と、資格づけ・価値づけ的な評価の有無を基準に、分類を行っている。八亀も「評価」のとらえ方は西尾、樋口と同様である。八亀は形容詞の主観的側面を踏まえ、「評価」と「時間的限定性」を軸に形容詞の意味を整理した。図1に八亀が構想する形容詞分類の2つの軸を示す。

以上のように、評価性や時間的限定性が形容詞・形容動詞の意味分析において、重要な観点になることがある。しかし、西尾、樋口、八亀の分類は定型化されておらず、意味分類には活用しにくい。そこで、ある程度定型化されている上原

（2002）の分類を意味分類に用い、先の三者の時間的限定性、評価性の観点を意味傾向の分析の際に援用していくことにする。

2.2 上原（2002）の意味分析の問題点と本稿の分類

上原（2002）は、頻出語を対象に形容詞・形容動詞の意味傾向を分析した。本節では、上原の分析の問題点を整理しよう。本稿での分析方法を定めることにする。

具体的な有形物と抽象的な事象との対比で述べる上原の考察は、二品詞の意味特徴の重要な側面である。しかし、上原の調査は頻出語リスト上での結果である。より多様な形容詞・形容動詞を取り上げれば、上原と異なる結果になる可能性がある。

また、上原は心理状態にかかわるクラスを設定していない。西尾（1972）、八亀（2008）も形容詞の意味分類に挙げている主流の意味だが、これらの語のクラス設定が不明である。

さらに、上原の対象語は形容詞と形容動詞で同数ではないため、数値での集計ではなく、各意味クラスの語を比で示している。一方が0の場合は、他方はそのクラスの語の数値が反映される。しかし、0になっているにもかかわらず、用例が存在しないわけではない。〈温度〉の形容詞と形容動詞の比は5対0とされているが、唯一の形容動詞として「暖かだ」を挙げており、上原の0の概念に曖昧性が残る。もとより、0は比になっていない。そのようなクラスが18クラス中、半数の9クラスあり、比にする意味を持たない。

形容詞・形容動詞の多様な語を同数で調査すれば、比ではな

表2：上原(2002)と本稿の意味クラスの比較

上原(2002)	本稿
1 (長さ、幅、厚さなど) 寸法	1 (長さ、幅、厚さなど) 寸法
2 物体の性質 硬度 形 重さ 温度 味 地形関係	2 物体の性質 硬度 形 重さ 温度 味覚 地形関係 触覚 聴覚 視覚
3 色	3 色
4 人の性質	4 人の性質
5 年齢	5 年齢
6 評価	6 評価・価値判断
7 速度	7 速度
8 光	8 光
9 確定・必然性	9 確定・必然性
10 必要性	10 必要性
11 運	11 運
12 技術	12 技術
13 複雑さ	13 難易度
14 ファッション	14 分布・区別
15 分布・区別	15 対照
16 対照	16 心理状態・心的態度
	17 状況・状態
	18 事象の性質
	19 位置・立場・関係
	20 程度・頻度・数量

く数値で示せる。さらに、二品詞の典型的な語だけでなく、形容動詞的なはたらきをするあらゆる語においての意味傾向が分析できる。そのため、本稿では形容詞・形容動詞の意味傾向の分析を行うにあたり、『現代日本語書き言葉均衡コーパス語彙表』の「短単位語彙表データ」から各品詞の語を同数ずつランダムに抽出し、意味分類を行うこととする。

意味クラスは、上原(2002)の意味クラスを精緻化して、本稿の分析で用いることにする。分類をする過程で、表2のように意味クラスを設定し直している。(ファッション)(派手な・上品な)は(物体・人の性質)に分類できるため削除し、(物

体の性質)には、上原の分類に触覚・聴覚・視覚の3項目を追加した。さらに、(評価)(複雑さ)のラベルを(評価・価値判断)(難易度)に変更した。また、新たに(心理状態・心的態度)(状況・状態)(事象の性質)(位置・立場・関係)(程度・頻度・数量)を追加した。意味クラスの数や対象語が異なるため、上原とは異なる結果が出るのが予想される。

2. 3 評価性・時間的限定性と意味クラスのかかわり

先に見たように、Backhouse や Dixon や上原の認知言語学の立場と、西尾や樋口や八亀の立場では、明確に「評価」の見方が分かれている。この二つの立場を代表して、上原をもとにした本稿の分類と八亀の分類を照合して整理してみる。

本稿の意味クラスを八亀(2008)の分類に対照させた結果を図2に示す。図2のように、A、Bグループの範囲に意味クラスが偏り、加えてグループ間に位置する語も複数見られる。A、Bグループにクラスが集中することは、形容詞・形容動詞に属性形容詞の範疇に入る意味クラスが多いという解釈ができる。しかし、上原の分類に不足があるともいえる。他のグループに属するクラスがさらに存在する可能性がある。

客観性が強く、時間的限定性がないAグループは従来「属性形容詞」といわれるものである。(寸法)(長い・広い)、(年齢)(若い)、(速度)(速い・速やか)、(分布・区別)(別々・ばらばら)、(位置・立場・関係)(間近)などは主観的な尺度が弱く、時間的な縛りがないクラスであり、これらはAグループに入ると思われる。同じように(物体の性質)(あたたかい・かたい)、

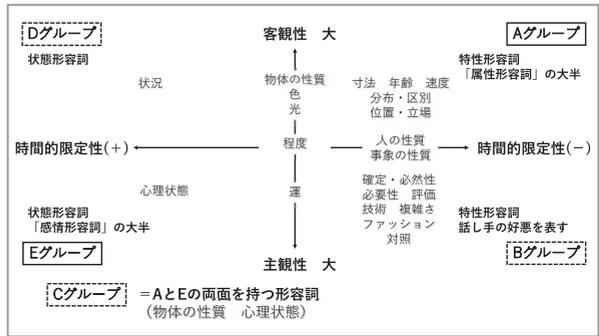


図2：八亀（2008）と本稿の分類の照合

あれば、時間にかかわることもあるといえる。たとえば、「炬燵はあたたかい」という表現は、一般的に時間的限定性がない炬燵そのものの性質を指す。これは八亀の述べる「海は大きい」などと同じ、「脱時間表現」である。八亀は、誰が見ても必然的な結びつきであり、社会的な「真理」と認められる表現は、脱時間的になると述べた。しかし、この文を「朝つけたので炬燵はあたたかい」などとすると、過去の電源を切った状態と比

「色」（白い・真っ赤な）、
 「光」（明るい・真っ暗な）
 も一見Aグループに含まれる。しかし、時間的限定性の有無で変化し、A、Dグループの間に位置できる点で先のクラスとは異なる。

八亀は、Givón（2001）の論を踏まえ、時間的限定性はグラデーシオンを持つことを述べている。図2に示すように、「光」は文脈によって時間的限定性の有無が変わる。八亀の表現でいえば、脱時間表現になることも

較した今の状態を含意しており、ここには時間的限定性があるといえる。

Givón（2001）や八亀の指摘どおり、時間的限定性のグラデーシオンが見て取れ、本稿の分類では、「物体の性質」〈色〉「光」がグラデーシオンに位置すると思われる。時間的限定性の有無は、形容詞研究において重要な観点だが、本稿の分析でさらに問題になるのは「評価性」の強弱を示す縦の軸である。

「人の性質」〈事象の性質〉は、主観性と客観性が拮抗しているクラスである。「人の性質」〈やさしい〉は「あの先生はやさしい」というように、対象の性質を客観的に言い表す「物体の性質」と類似している。しかし、これは対象そのものの性質か主体の判断か、その境界が曖昧である。「事象の性質」〈怖い・奇妙な〉も同様である。形容詞には全般に評価性が含まれると西尾が指摘しているが、この「人の性質」〈事象の性質〉は、「物体の性質」〈色〉よりも主観性の度合いがやや強いと思われる。Cグループのように記述的側面（客観性）と評価的側面（主観性）が拮抗しているが、これらは時間的限定性がほとんどないので、A、Bの中間に位置するといえる。

Bグループに〈確定・必然性〉（明らかな・確かな）、〈必要性〉（必要な・大切な）、〈評価・価値判断〉（よい・正しい）、〈技術〉（上手い・器用な）、〈難易度〉（簡単な・複雑な）、〈対照〉（対等な）を置いたが、実際は該当するグループが存在しない。これらは時間的限定性がなく、客観性よりも主観性が強く出るが、好悪を表すBグループと完全には合致しない。上原（2002）によるとこれらのクラスは形容動詞に多いとされるが、八亀

(2008)は形容動詞の語彙の想定が不足していると思われる。八亀は二つの軸を基準にしているため、典型的な意味中心の分類であり、この軸から外れる語が多い可能性がある。

さらに、上原(2002)にもいえるが、八亀は西尾(1972)が設定する「程度」にかかわる語(十分・沢山)を想定していない。これらは副詞として認識されることが多い。時間的限定性の有無に関しても評価性に関しても、文脈によって変化し、どちらも中間的に位置するといえる。

計量的に調査した上原は、意味の範囲を想定できたものの、八亀は計量的な調査ではないため、想定していない語が多い。しかし、八亀ほかの時間的限定性・評価性の視点は、上原の論で焦点化されておらず、その視点が形容詞・形容動詞の意味傾向に関連を持つ可能性もある。そのため、上原の分類を基準に対象語を分類し、その分析において八亀の視点を適宜取り入れ、形容詞・形容動詞の意味的特徴の考察を行う。

3. 形容動詞と形容詞の意味傾向分析

3.1 対象と方法

ここでは、形容動詞と形容詞の意味傾向を分析するための対象語と方法を述べる。形容詞は、形態面で形容動詞とは明らかに異なる。形態的に連続性を持つものは数が少なく、「細かい(細かな)・あたたかい(あたたかな)・柔らかい(柔らかかな)」などしか見られない(村木1998、上原2002ほか)。そのうえ、統語面では大きな差がないとされている。形態的には差異が大きく、統語的には差異が小さすぎるため、これらの観点

を用いた両品詞の意味分析はしづらい。したがって、形容詞・形容動詞の意味分析には各品詞の語を一定数収集して意味分類をしていく上原(2002)の方法が妥当である。

対象語は、『現代日本語き言葉均衡コーパス語彙表』の「短単位語彙表データ」から抽出する。頻出語だけではなく、ランダム関数を使用し、頻度にかかわらず対象語とする。頻度の高い語の意味は、同時に形容詞・形容動詞の意味として主流の位置を占めることを示し、分類した際に主流の意味クラスの値ばかりが大きくなることも考えられる。典型的な意味でなく、周辺の意味に両品詞の意味特徴が表れることもあり得る。

品詞指定は「形容詞ー一般」「形状詞ー一般」「形状詞ータリ」で行う。上原(2002)が対象とした形容動詞は、語幹に「ーな」が付くものであり、タリ活用は含めていないが、これらが何らかの特徴を持つことも踏まえ、本稿では分析に入れる。

意味クラスは、表2のとおり精緻化したものを用いる。語数は、本稿の意味クラスが全部で20クラス存在するため、統計的な妥当性を鑑みて、同数ずつ分類されたときに二桁になる20語とする。両品詞合わせて40語となり、上原の対象語数406語と近い値になる。これ以下であると1クラスの平均数値が一桁になり、数値の差に有意性が認められなくなる可能性がある。

語種は和語と漢語、外来語を除く混種語とする。外来語由来の形容詞「ナウイ」「エモい」「グロい」や形容動詞「シンプル」などは、日本語研究において十分に検討の余地がある。しかし、外来語の形容詞・形容動詞化は品詞性の問題だけでなく他因子も影響している可能性が高く、形容詞と形容動詞の意味

傾向を見る本稿の分析にそぐわない。そのため、外来語は除外して分析を行う。これまでの対象語の抽出方法を以下に示す。

使用媒体…『現代日本語書き言葉均衡コーパス語彙表』

「短単位語彙表データ」

品詞指定…「形容詞ー一般」「形状詞ー一般」「形状詞ータリ」

対象語数…形容詞・形容動詞各200語（計400語）

抽出手順…ランダム関数を使用し、昇順で200語ずつ

語種…和語／漢語／混種語（外来語を除く）

本稿では他の要素を加えず単一構造を成す語の分析とするため、この方法に加え、対象から除外する語を個別に選別する。

前接要素に「ない」がつく形容詞の取扱いを述べる。前接要素と「ない」の間に格助詞「が」を入れられないもの（みつともない・覚束無い）は形態的な緊密性が高く、一語としてとらえられるため、対象に加える。反対に「が」を入れても不自然でないもの（仕方無い・さり気無い）は対象に加えない。

「黴臭い」「犬好き」などの「名詞＋用言」、「青黒い」などの「形容詞＋形容詞」の複合語の語群は、対象から除外する。「耳障り」なども「名詞＋用言」であり、先の除外する例と一致する。しかし、たとえば「黴臭い」は前接要素（A）と用言（B）が「AがBである」の構造になっている。意味としても「かびのにおいがする。」（『岩波国語辞典』2019年第八版）であり、単語になったことで意味に大きな変化がない。一方、「耳障り」は「（身体器官としての）耳を害すること。」を意味するのでは

なく、慣用的に「聞いていて、気にさわること。」（『岩波国語辞典』2019年第八版）を意味する。これは単語になったことで別の意味が付与されている語である。以上から、複数の品詞が結合して一語になった際にもとの意味の掛け合わせではなく新たな意味が付与されている語は、対象に加えることとする。また、「心安らか」「物悲しい」「生温かい」なども対象に加える。

これらは先の「犬好き」などと異なり、形容詞・形容動詞の前接要素の入れ替えが不可能なものであるといえる。さらに、程度を強める要素が付いた「糞真面目」「激辛」などは、これらの程度性が意味へ影響することを考慮し、対象に加える。

「好き勝手」「自分勝手」など形容動詞や名詞に「ー勝手」が後接して形容動詞化した語群は、系統的に同じ意味になるため、数値への影響を考え、除外する。

名詞に「ー的」が後接し、形容動詞化した「物的」「靈的」なども除外する。「ー的」は、主に名詞に接続し、「そのような性質を持った」という意味を加える要素であり、その造語力は非常に強い。「ー的」の拡大は日本語研究として重要な意義を持つが、本稿では従来の形容詞・形容動詞の意味分析が目的であるため、省く。

その他、現代日本語の活用に準じていない特殊な用例は対象から省く。表3に対象に入る語と除外する語を整理した。

分類方法は、上原（2002）にしたがい、各語の基本的意味を取り上げ、意味クラスに分類する。基本的意味を調べると、『岩波国語辞典』（2019年第八版）を使用し

表3：対象語と対象外の語の例

対象に入る語（例）	対象外の語（例）
前接要素+「ない」（情けない・覚束無い）	前節要素+「ない」（仕方無い・さり気無い）
物+〔形容詞・形容動詞〕（物悲しい・物静か）	指示語相当（そんな・ス様）
心+〔形容詞・形容動詞〕（心強い・心穏やか）	〔名詞〕+好き（犬好き） 〔名詞〕+臭い（微臭い）
生+〔形容詞・形容動詞〕（生白い・生温か）	〔形容詞〕+〔形容詞〕（甘辛い・長細い）
激・（激辛・激やば） 糞・（糞真面目）	力・（力任せ・力強い） - 的（物的・霊的）
大・（大違い・大嫌い） べた・（べた甘）	- 勝手（好き勝手） 事細か 色鮮やか
骨太 耳障り	古語の形容詞語尾が「い」（静けい）

3.2 分析と考察
 「基本的意味」で、**形容詞・形容動詞の対象語を意味クラスに分類するにあたり、**のではなく、**複数の意味クラスに対応する例も見られた。**その

た。上原も調査で『岩波国語辞典』(1963年初版)を採用している。『岩波国語辞典』では第八版の凡例において、「一語に幾つかの意味を立てた場合には、時代的に古い意味から始めることなく、出来るだけ現代語として最も普通に行われている意味から始める方針を採った」とあり、初めに記載された意味が基本的意味となる。各語の基本的意味をとらえる上での利便性を考慮し、本稿でも『岩波国語辞典』第八版を用いて、意味分類を行う。なお、『岩波国語辞典』に記載のない語は『精選版日本国語大辞典』(2006年初版)、『デジタル大辞泉』(2021/12/14/21)アクセス確認)を用いて意味を精査した。次節では以上の方法から対象語を意味分類した結果と考察を示す。

表4：形容詞・形容動詞の意味クラスの分類結果

対象語	ランダム語				出現頻度の高い語			
	第一判断のみ反映		第二判断入れ替え		第一判断のみ反映		第二判断入れ替え	
	形容詞	形容動詞	形容詞	形容動詞	形容詞	形容動詞	形容詞	形容動詞
1 寸法（長さ・幅・厚さ）	13	15	12	13	18	6	18	7
2 物体の性質	40	22	38	27	42	11	40	14
3 色	5	1	4	1	6	3	6	3
4 人の性質	47	49	50	47	24	32	16	29
5 年齢	1	1	2	1	2	0	3	0
6 評価・価値判断	6	11	5	9	12	25	16	26
7 速度	1	3	1	3	2	4	3	4
8 光	4	3	5	3	4	1	4	1
9 確定・必然性	0	4	0	3	0	10	0	11
10 必要性	0	1	0	2	1	9	0	9
11 運	1	0	1	0	0	0	0	0
12 技術	0	0	0	0	1	3	1	3
13 難易度	3	3	3	3	2	6	2	6
14 分布・区別	1	6	1	6	0	17	0	14
15 対照	0	3	0	3	1	6	1	6
16 心理状態・心的態度	57	27	56	32	57	15	58	14
17 状況・状態	5	5	4	3	10	11	8	12
18 事象の性質	8	21	11	22	3	11	11	11
19 位置・立場・関係	1	6	1	6	1	7	1	6
20 程度・頻度・数量	6	18	5	15	12	21	11	22
時間関係	1	1	1	1	2	2	1	2
総計	200	200	200	200	200	200	200	200

ため、意味クラスを第一、第二判断に分け、第一判断を反映させた結果と、第一、第二判断を入れ替えた結果を提示する。ランダムで抽出した語と頻出語を意味分類した結果を表4に、結

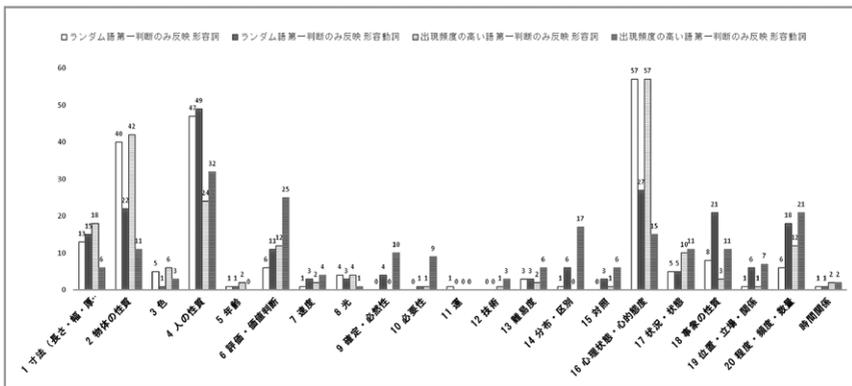


図3：形容詞・形容動詞の意味クラスのカテゴリ別結果

果をグラフ化したものを図3に示す。グラフは、第一判断を反映させたもののみにしている。各意味クラスの傾向を見ていく。上原(2002)は、有形物の状態や性質を表すクラスを「基本的な意味クラス」とし、基本的な意味クラスは形容詞に多いと指摘している。本稿の意味クラスでいう〈寸法〉〈物体の性質〉〈色〉〈年齢〉〈速度〉にあらるが、〈寸法〉〈速度〉で上原と異なる数値が出ている。表5に上原の意味分類結果を載せる。ランダム語では

頻出語と比べ、〈寸法〉の形容動詞が多い。〈寸法〉には形容詞「長い」「薄べったい」、形容動詞「さちさち」「小さめ」などが含まれる。形容動詞には「ばんばん」「広め」などの畳語や接尾辞「ーめ」のつく語が15語中8語ある。頻出語の〈寸法〉は、形容詞が形容動詞を上回り3対1であり、上原とほぼ同様の結果を得られた。頻出語では形容詞に傾くが、ランダム語では畳語や接尾辞「ーめ」などの形態的な特異性が数値に影響し、形容詞とつり合うものになったといえる。

〈速度〉の形容詞には「素早い」「遅い」、形容動詞には「迅速」「速やか」などがあり、ランダム語、頻出語ともに形容動詞の割合が多い。ここで問題となるのは上原が頻出語である「早い」を〈速度〉に換算しているのかである。上原は個別の分類結果を示していない。「早い」は主に時間の経過の短さを意味しており、「動くもの」のすすみが著しい。〔岩波国語辞典〕(2019年第八版)

表5：上原(2002)による形容詞と形容動詞の意味クラスの比

意味クラス	形容詞	形容動詞
色	5	3
年齢	3	0
速度	4	3
寸法	14	5
光	3	1
形	3	2
重さ	3	0
温度	5	0
味	7	0
地形	4	1
確定・必然性	0	7
必要性	0	4
運	0	6
技術	0	7
複雑さ	0	9
ファッション	1	11
分布・区別	1	5
対照	3	21

ことを指す「速い」とは漢字でも区別される。しかし、「速い」は『岩波国語辞典』（2019年第八版）、『大辞泉』（2012年第二版）のどちららにおいても、「早い」と表記できることが示されている。「早い」を〈速度〉として分類することもできるが、時間的な面だけを取り上げれば、〈時間関係〉という別のクラスを設定する必要性も出てくる。表内では臨時的に〈時間関係〉のクラスを設定しているが、形容詞、形容動詞どちらにおいてもその割合は1%以上にならない。〈速度〉は形容詞・形容動詞のどちらも数が少ないので、形態の傾向は読み取れないが、形容動詞が若干大きくなっている。

他の基本的なクラスである〈色〉〈年齢〉では、上原の指摘どおり微差で形容詞に傾いているが、ランダム語の形容詞は「若い」「幼い」、形容動詞は「若め」が入っており、ここでも接尾辞「ーめ」の形容動詞が現れる。ランダム語での〈年齢〉の比は2対1なので、大きな差とはいえない。〈色〉のクラスはランダム語でも頻出語でも形容詞のほうが多いといえる。

残る〈物体の性質〉は、上原の指摘どおり頻出語のほうでは大きく形容詞に傾くが、ランダム語での比は形容詞対形容動詞ではほぼ2対1になっており、〈年齢〉のクラスと同じで差が大きくない。頻出語では差が大きいのが、ランダム語では差が小さくなっていく要因として、次のことが挙げられる。ランダム語の〈物体の性質〉には「ぐしやくしやく」「すべすべ」などの疊語、「緩め」「重め」など接尾辞「ーめ」のつく語、タリ活用の「片々」「夏然」などの語が多く存在しており、これらが数値に影響していると考えられる。これらは頻出語には見られないが、頻度にか

かわらず語を収集すると頻繁に見られるものである。疊語などの形態の違いによって〈物体の性質〉を表す形容動詞が、意味の広がりを見せているということができる。

Backhouse（1984）は〈色〉〈年齢〉〈速度〉に形容動詞が存在しないことを指摘しているが、本稿の調査ではいずれのクラスにおいても、いくつかの語が確認されている。〈年齢〉〈速度〉の形容動詞は先述のとおりであり、〈色〉には「真っ白」「真っ赤」など「真っー」がつく語がある。形容詞にしか存在しなかった〈色〉のクラスが「真っー」という一定の形態の語によって、形容動詞に補われていることになる。

また、上原の分析では表5に見るとおり〈重さ〉〈温度〉〈味〉に形容動詞が存在しないとされるが、「重め」「温か」「円やか」などの語が存在している。本稿の調査では上記の限られた語であったが、対象語を増やせば、「軽め」「熱め」「甘め」「辛め」なども〈重さ〉〈温度〉〈味〉のクラスに相当すると思われる。先述の〈寸法〉のクラスからもわかるように、接尾辞「ーめ」の形態は、これまで存在しなかったあるいは数が少なかった形容動詞の意味クラスを数値的に補うものになっているといえる。

上原（2002）の「基本的な意味クラス」で形容詞のほうが多いといえるのは〈物体の性質〉〈色〉であり、「基本的な意味クラス」に形容詞が多いという指摘は十分だといえない。頻出語では〈速度〉以外で上原のように分析できるが、形態の変化によって今後他のクラスでも数値が覆ることが考えられる。

上原の考察する抽象的な「こと」を表すクラスに形容動詞が

多いという点を検討する。上原の指摘のように、「確定・必然性」(「必要性」)のクラスや「事象の性質」は頻出語・ランダム語のいずれにおいても形容動詞が多く、形容詞が見られないものもある。上原の指す抽象的な「こと」を表すクラスの範囲が明確でないが、「評価・価値判断」(「分布・区別」)「対照」(「位置・立場・関係」)「程度・頻度・数量」のクラスも形容動詞に多い。頻出語においては「人の性質」も形容動詞に傾く。上原の調査でも同じく5対31の比で形容動詞に傾いている。

ここまでの頻出語の意味クラスの傾向をまとめると、形容詞に多いクラスは「寸法」(「物体の性質」)「色」(「年齢」)「光」(「心理状態」)であり、形容動詞に多いのは「人の性質」(「評価・価値判断」)「確定・必然性」(「必要性」)「技術」(「難易度」)「分布・区別」(「対照」)「事象の性質」(「位置・立場・関係」)「程度・頻度・数量」である。しかし、ランダム語では「寸法」(「人の性質」)「年齢」(「光」)「難易度」で数値的な差が縮まっている。「状況」のクラスはランダム語、頻出語ともに両品詞の数値に大きな差がない。

ここで、上原とは別の視点から2品詞の意味的差異を検討するため、本稿の調査の意味クラス分類の結果と図2を照合させて考えてみる。2品詞それぞれの数値が傾いている意味の範囲を図に起こすと図4のようになる。意味クラスのラベルは本稿のラベルに変更した。ランダム語と頻出語で、数値の偏りが変わる場合は明確に分けずに示している。

形容詞の数値が多いクラスは、客観性が強く、時間的限定性が中間的な類と、主観性が強く時間的限定性のあるEグループ、

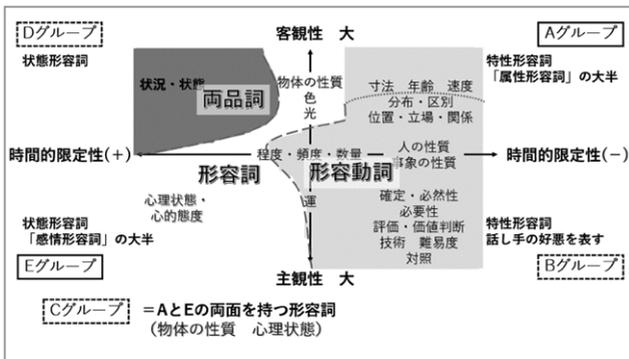


図4：形容詞・形容動詞の意味範囲の傾向

そしてA、Eの両面を持つCグループに位置していることが読み取れる。形容動詞に数値が傾いているクラスは、主観性が強く、時間的限定性がないBグループに特に多いことがわかる。また、評価性・時間的限定性の基準では包含できない「程度」のクラスも形容動詞が数値的に多い。さらに、ランダム語の調査からわかるのは、客観性が強く、時間的限定性のないAグループの語も形容動詞に比率が傾きつつあるということである。

全体を通して見ると、形容動詞は、意味的に時間的限定性が関与しない傾向にあると判断でき、主体のかわりを伴う意味には形容動詞が多いが、客観性の強い意味にも広がりつつある。したがって、形容動詞が補う意味の幅は拡大していることが考察できる。形容詞は、どちらかというと時間的限定性にかかわる意味傾向にあり、特に従来「感情形

容詞」と呼ばれる、心的なものに関する意味には形容詞が多い。今回の調査で〈運〉のクラスはほとんど数が出てこなかったため、ここでは検討ができなかった。上原(2002)と山田(2020)の調査では、「幸せ」「幸運」「不幸」などがこのクラスにあたるが、これらの語はコーパス内で、「形状詞一般」でなく「名詞ー形状詞可能」として、識別されている。そのため、今回の調査では出なかつたが、形容動詞として存在しないわけではない。今回の〈運〉のクラスの形容詞の数値を考えると、〈運〉も形容動詞に傾くことが予測される。そのため、図4の〈運〉は形容動詞の範囲に含めている。

4. 形容動詞と形容詞の意味分析のまとめ

本稿では、形容詞と形容動詞の意味傾向を数量的に分析した。形容詞・形容動詞の意味傾向の分析のため、両品詞の意味にかかわる先行研究をまとめ、両品詞の意味の相関を調査した上原(2002)の問題点を指摘した。認知言語学の立場と、評価性・時間的限定性の視点を照合させ、本稿での調査の対象と方法を設定し、意味分類の結果から以下の4点を明らかにした。

- ①形容詞(形容動詞含む)の意味分類は決まった体系が確立されておらず、意味のとらえ方、特に評価性のとらえ方は研究者ごとに立場が分かれる。
- ②形態の特異性(疊語・接尾辞「ーめ」・接頭辞「真っー」等)によって、これまで形容動詞に存在しなかつた、または数値が小さかつたクラスに形容動詞が補われ、形容詞と数値

的につり合う、または差が縮まっているものがある。

- ③形容動詞は時間的限定性に関与しない傾向があり、主観性の強い意味クラスに比較的多いが、客観性の強い意味にも数値が偏りつつある。

- ④形容詞は時間的限定性にかかわる傾向があり、特に心的なものに関する意味には形容詞が多い。

本節では、形容詞と形容動詞の意味傾向として、以上のことを考察した。形容詞は時間的限定性にかかわるものが多いため、別の言い方をすれば「状態」に関するものに形容詞が多いといえるが、対立観点である「性質」に関するものに形容動詞が多いかという点とそうとは言い切れない部分があり、この点の検討が不十分である。また、形容詞は連用形になると連用修飾である副詞と類似した形態になり、重ねて考えられることがある(鈴木1972ほか)。形容動詞に限らず、形態的に重なりを持つ形容詞と副詞との連続性も検討の余地がある。

引用・参考文献・関連URL

上原聡(2002)「日本語における語彙のカテゴリ化ー形容詞と形容動詞の差についてー」大堀壽夫(編)『認知言語学Ⅱ・カテゴリー化』81-103頁 東京大学出版会

小木曾智信・中村壮範(2011)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報データベースの設計と実装 改訂版』文部科学省科学研究費特定領域研究

春日和男(1973)「形容詞の発生」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別

日本文法講座 形容詞・形容動詞』8-27頁

加藤重広(2013)『日本語統語特性論』北海道大学出版会

加藤重広(2015)「形容動詞から見る品詞体系」『日本語文法』15(2)、48-64頁

北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店

北原保雄(2010)『日本語の形容詞』大修館書店

国立国語研究所編(2004)『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書

鈴木重幸(1972)『日本文法・形態論』むぎ書房

時枝誠記(1950)『日本文法 口語篇』岩波書店 128-134頁

西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所報告44、秀英出版

西尾実・石淵悦太郎・水谷静夫・柏野和佳子・星野和子・丸山直子編(2019)『岩波国語辞典』第八版 岩波書店

仁田義雄(2000)「単語と単語の類別」『日本語の文法1 文の骨格』岩波書店

日本国語大辞典第二版編集委員会(2006)『精選版 日本国語大辞典』小学館

橋本進吉(1937)『改制 初年級用』富山房(文部省検定済)

橋本進吉(1948)「國語の形容動詞について」『橋本進吉博士著作集 第2冊 國語法研究』岩波書店98-130頁

樋口文彦(2001)「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学10』むぎ書房43-66頁

松村明監修『デジタル大辞泉』小学館(2021/12/14-12/21 アクセス)

確認)

八亀裕美(2007)「第2章 形容詞研究の現在」工藤真由美編『日本語形容詞の文法―標準語研究を超えて―』ひつじ研究叢書(言語編)63、ひつじ書房

八亀裕美(2008)『日本語形容詞の記述的研究―類型論的視点から―』明治書院

芳賀矢一(1905)『中等教科明治文典』富山房
Backhouse, A.E. (1984) "Have All the Adjectives Gone?". *Lingua* 62pp.169-186

Dixon, R.M.W. (1977) "Where Have All the Adjectives Gone?". *Studies in Language* 1.1pp.19-80

Givón, Talmy (2001) "Syntax 1 2nd ed". *An Introduction*. John Benjamins

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」中納言2、4、5 データページ
2021.03 (<https://chunagon.nijjal.ac.jp/>)

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」語彙表 短単位語彙表データ
(https://pjini.jal.ac.jp/corpus_center/bocwv/freq-list.html)

注

1 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」では形容動詞語幹を「形容詞」として扱う。

※本研究は2021(令和3)年度に提出した修士論文の一部である。
(愛知県立豊田南高等学校教諭 令和3年度修了生)